5．地方自治体の将来人口推計と人口関連施策への認識―アンケート調査の結果より―
…… 山内　昌和（国立社会保障・人口問題研究所）
西岡　八郎（国立社会保障・人口問題研究所）
小池　司朗（国立社会保障・人口問題研究所）

なお初日の会員総会において学会賞の授賞式がおこなわれ，和田光平会員（『Excel で学ぶ人口統計学』オーム社，2006年９月）に普及奨励賞，小林淑恵会員（「結婚・就業に関する意識と家族形成：循環モデルによる検証」『人口学研究』第39号，2006年11月）に優秀論文賞，大友篤会員（『続人口でみる世界：人口変動とその要因』古今書院，2006年11月）に学会特別賞が授与された．

（佐藤龍三郎記）

日本人口学会2008年度・第１回東日本地域部会

日本人口学会の2008年度第１回東日本地域部会が2008年９月12日，札幌市立大学サテライトキャンパス（北海道札幌市）にて開催された．人口移動に関する報告が多数を占め，地域部会の特性を活かした丁寧なプレゼンテーションと活発な質疑が交わされた．報告タイトルと発表者は下記の通りである．

１．「所属世帯別高齢人口の将来動向と変化要因の分析
―日本の世帯数の将来推計（全国推計：2008年３月推計）の結果分析―」
山内昌和・西岡八郎・鈴木透・菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）

２．「都道府県間人口移動流のモデル化とその経年変化分析」
小池司朗（国立社会保障・人口問題研究所）

３．「団塊世代の農村定住条件と就農条件―郵送調査とインターネット調査の比較による考察」
飯坂正弘（独立行政法人／農業・食品産業技術総合研究機構）

４．「2005年の市町村間通勤マトリックスと通勤圏設定の試み」　大林千一（帝京大学）

５．「1970年代までの東北と北海道の間の『移民』と『出稼ぎ』」　阿部　隆（日本女子大学）

（山内昌和記）

日本地理学会2008年秋期学術大会

日本地理学会2008年秋期学術大会は，10月４日・５日の両日，岩手大学（岩手県盛岡市）において開催され，例年同様，幅広い分野における報告やポスター発表があった．今回は東北地方での開催ということで，『新「東北の将来」を語る』と題したシンポジウムが企画され，多数の参加者でにぎわった．本シンポジウムでは趣旨説明の後，日本女子大の阿部隆教授より「東北の人口－過去，現在，そして未来？」のタイトルで東北地方における将来人口の試算推計結果などが報告され，続いて都市・工業・農林業など地理学に関連する様々な研究領域からの報告と総合討論が行われた．人口減少問題は全体を通して強く認識されており，様々な社会経済活動の基盤としての注目度は非常に高かった．厳しい状況には変わりない東北地方であるが，従来時代の流れにあまり左右されなかったことは有形・無形の資源残存につながり，今後の人口減少社会ではそれらが再評価される面もあるのではないかと感じた．

また，「人口」セッションにおいては下記の３報告があり，活発な議論が交わされた．

「国際労働力移動としての現地採用日本人女性―シンガポールにおける調査から」
……中澤高志（大分大）ほか
「国際結婚移住女性に対する自治体支援施策の展開」……神谷浩夫（金沢大）ほか
「過疎地域における定住者と転出者の意識構造―東北地方の某町を例に」
……山口泰史（荘銀総合研）ほか
（小池司朗記）

第73回日本民族衛生学会総会

日本民族衛生学会の2008年年次総会（会長：高坂宏一・杏林大学総合政策学部教授）は10月26～27日，パシフィコ横浜・会議センターで開催された．少子化と人口高齢化が進行し子どもを取り巻く環境も変貌している日本の現状を少子高齢化社会のライフコースとして検討することが意図され，会長講演，シンポジウム（子どもの成長について，その変化と影響要因を考える），特別講演（２題）が組まれた．また口演と示説の形式で，多数の一般演題報告がなされた．佐藤は２日目に特別講演１として「日本の超少子化：その原因と対策をめぐって」と題する講演をおこなった．本大会を通して，医学・保健学方面からの人間のライフコースや生態系に関する研究と人口学研究との接合に大いに期待が寄せられた．（佐藤龍三郎記）

東・東南アジアにおける低出生力とリプロダクティブ・ヘルスに関する国際カンファレンス

日本大学人口研究所（小川直宏所長）主催，世界保健機関（WHO），国連人口基金（UNFPA），国際人口学会（IUSSP）および毎日新聞社後援による学術会議（International Conference on Low Fertility and Reproductive Health in East and Southeast Asia）が2008年11月12日から14日までの３日間にわたりホテル・グランドパレス（東京都千代田区）で開催された．人口学，公衆衛生学，生殖医学など多分野から，また米国（Larry Bumpass, Ronald Rindfuss, Robert Retherforodなど），欧州，オーストラリア（Peter McDonald），アジア（韓国，中国，タイ，ベトナムなど）など世界各地および日本から約50人の専門家が集い，「少子化」と「リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）」，しかも「東・東南アジア」に注目して，という新しい研究視点から活発な議論を繰り広げた．２題の基調講演と28題の研究報告（それぞれに討論者）からなる議論は多岐にわたったが，なかでも従来少子化の原因探索において，いわば傍流（非主流）の地位に甘んじていた不妊（精子数減少？），性行動の変化（セックスレス・カップルの増加？），東アジアの特殊性といった話題にスポットライトが当たったのは意義深いことに思われた．本研究所の佐藤は岩澤美帆室長と共同で“Does promoting reproductive health benefit Japanese fertility?：New policy dimensions of very low fertility”と題する研究報告をおこなった．（佐藤龍三郎記）